

社会人経験者にとっての日本留学と日本語学習の意味：ライフストーリーから見た自律的学習・葛藤・変容

著者	村田 晶子, 池田 幸弘, 長谷川 由香
出版者	法政大学グローバル教育センター日本語教育プログラム
雑誌名	多文化社会と言語教育
巻	1
ページ	1-13
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00024426

doi: info:doi/10.50921/jlp.1.0_1

【論文】

社会人経験者にとっての日本留学と日本語学習の意味

—ライフストーリーから見た自律的学習・葛藤・変容—

The Meaning of Studying in Japan for People with Prior Work Experience:

Analyzing Self-Directed Learning, Dilemmas, and Transformations via Life Story Interviews

村田晶子・池田幸弘・長谷川由香

要 旨

日本語を学ぶ人々のライフストーリーの調査をすることは、彼らの生き方、日本語を学ぶ動機、そして、日本語を用いてどのように社会と関わっているのかを理解する上で役立つ。本稿では母国で社会経験を積んでから来日し、日本語を学んだ人々にライフストーリーインタビューを行い、日本留学が彼らの人生にとってどのような意味があったのかを明らかにした。分析では、Knowlesの成人学習像、Mezirowの変容的学習論を援用し、社会経験のある人々が職業経験を踏まえた自律的な学習の方向付けを行っていく過程を明らかにするとともに、留学における葛藤や悩み、留学を通じた変容を明らかにし、それぞれが相互作用していることを分析した。加えて、本稿の最後にインタビュー協力者のライフストーリーに対する感想、そして、調査者らによるライフストーリーインタビューの実施及びライフストーリー作成に対する省察を示し、ライフストーリーが教員とプログラム修了者の双方にとって継続的な対話の機会になり、教育の改善につながりうるものであることを示した。

キーワード：社会人、自律的学び、葛藤、変容、ライフストーリー

1. 理論的背景

ライフストーリーとは、個人の生き方の記述であり、調査者が話し手の経験に基づいて、その人の生活世界とその背景にある社会文化を読み取り、記述する質的調査法である（桜井2012）。留学生が、国際移動と留学を経て、どのように生きているのか、そこにはどのような社会的な文脈が影響しているのかを知ることは、日本語教育の関係者が今後の教育の在り方を考えていく上でも示唆に富むものであるとともに、広義には、外国にルーツをもつ人々の受け入れ支援（生活、進学、就労支援等）を拡充させていく上でも参考になる情報を提供することにつながる。

留学生のライフストーリー研究として、これまで様々な分析が行われており、留学を通じた自己実現やアイデンティティの模索、社会との主体的な関わり方、進路決定のプロセス、卒業後のキャリア形成のプロセスなどについて様々な検討がなされてきた（佐藤

2013、三代 2014、久野 2017、2018、中井 2018、池田 2019)。

しかし、これまでの研究では、母国で就労経験のある学生（日本語教育プログラムの学生）のライフストーリーの分析は十分には行われていない。先の見えない社会において、生涯にわたるキャリア構築が求められる中、社会人にとっての日本留学を分析することは、多様な背景をもつ日本語学習者の理解に役立つとともに、日本語を学ぶ人々のその後のキャリア支援のあり方を考えていく上で役立つと考える。本稿はこうしたことを踏まえて、来日前に社会経験（職業経験）のある3名の元留学生（プログラム修了生）に焦点をあて、彼らが日本留学、日本語学習をどのように価値付けたのかを明らかにする。

成人期の人々の学びを分析する上で示唆的なのが、Knowles の成人学習像、Mezirow の変容的学習論である。Knowles (1975) は、子どもの学習と比較し、成人学習者は、社会的な経験に基づいて学習の方向付けができるとし、大人の学習者の特性である、自律性、自己主導型学習(Self-directed learning)に対応した教育が必要であると述べている。これに対して、Mezirow (1991)は、成人学習者の学習特性を所与のものとして、分析の視点を変容プロセスに移行させている。Mezirow は教育哲学者 John Dewey の省察的な体験学習のフレームワークを軸として、学習者が批判的な省察活動（社会的な前提や固定的な視点に対する批判的な振り返り）を通じて成長していくプロセスこそが自律性を生み出すと分析している（変容的学習、Transformative Learning）。本稿では上記の二つの視点がどのように学習者の語りに現れるのかを分析し、社会経験を踏まえた自律的な学習の具体例、そして社会経験があるからこそその留学の葛藤と変容を浮き彫りにし、それらの相互作用についても考えたい。

2. 調査方法

本稿で分析するのは、来日前に社会経験のある3名のプログラム修了生で、詳細は表1のとおりである。インタビューは2020年の8月にZoomで実施した。

【表1 修了生の背景と修了後の進路】

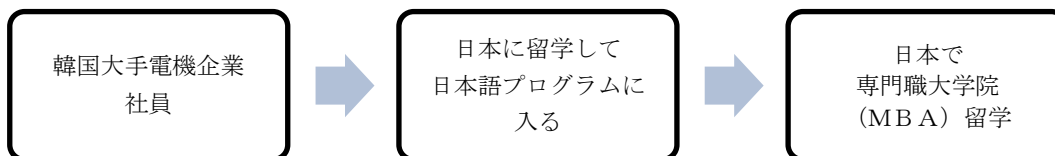
	Aさん	Bさん	Cさん
出身	韓国	中国	ベトナム
年齢	30代	40代	30代
1.来日前の背景 (学歴)	韓国の大手IT企業社員（工学部管理工学、商学部経済学のダブルメジャー）	中国から日本への技能実習生送り出しに関わる仕事に従事（外国語学部日本語学科）	ベトナムの日系企業で働いていた（日本語学科）
日本語プログラムの履修期間	2学期間	1学期間	2学期間
修了後の進路	日本の大学院修士課程に入学	日本の大学院修士課程に入学	帰国して就職
今後の予定	日本の監査法人で働いた後、独立したい	技能実習生の送り出し、介護、福祉の知識を社会で生かす	ベトナムでホテルビジネスに携わり、将来は自分のホテルを作りたい

インタビューは半構造化インタビューで、主な質問事項は、①来日前の状況、②留学中の経験を振り返って、③日本語教育プログラム修了後の人生についてである。各インタビューは調査者のうち2名が担当した（1名が質問担当、もう1名がメモ取り）。インタビューは協力者の許可を得て録画し、文字化した。スクリプトの作成にあたって日本語の表現、文法等の間違ひについては意味を変えない範囲で修正した。スクリプトの作成は3名で行い、スクリプトをまとめた本文のライフストーリーと文字化スクリプトとの間に情報の齟齬がないかどうか全員がチェックした。本稿の執筆は村田が行い、5の各教員の内省部分は村田、池田、長谷川がそれぞれの振り返りを記述した。

3. 分析

3.1 Aさん：グローバルな公認会計士への道

Aさんは韓国出身で、来日前は韓国の有名私立大学を卒業し、大手電機企業の社員として働いていた。昇進のための評価としてMBAは重要であるため、留学をすることにした。日本語能力試験の2級をもっていたが、本場で会話スキルを高めたかったので、まず大学の日本語プログラムで学んでから大学院に入ることにした。



【図1 Aさんの来日前と留学の流れ】

来日後のフラストレーション

Aさんにとって人生はじめての日本留学は簡単ではなかった。日本で生活するための手続きが思ったより手間がかかるものであることに驚いた。役所、銀行、住居など、日本に住むための手続きがオンライン化されておらず、自分で手続きに行かなければならない煩雑さにストレスを感じた。

また、大学の日本語プログラムでも最初は浮いていた。もともとAさんが韓国で働いていた企業は保守的で、上下関係が明確であり、軍隊経験もあったことから、日本での教員との距離の取り方がわからず、授業の時間外で質問したくとも相手が迷惑ではないかと遠慮していた。

正直、プログラムに入って一番感じたのは、先生と学生さんの関係、韓国では、師匠イコール師イコール神イコール父、これが同じレベルなんですよ。だから、結構、距離感をもって、教師は、難しいポジションです。韓国で学んで、軍隊生活4年間した人間なので、固いんです。頭も保守的で……。先生の考え方が何となく感じられるようになったが、その時点まで3か月ぐらいかかりました。

また他のクラスメートとは年齢的な差もあり、考え方も政治的なスタンスも異なって

いたので話が途切れてしまったことが何度もあった。しかし、日本での人との距離感に次第に慣れ、教員の考え方を学ぶことで、だんだん質問してもいいと思うようになった。年下のクラスメートとの関係にも慣れ、学校生活はストレスがなくなっていった。大学の日本語プログラムでは、日本語や日本文化、正しい文法の使い方、敬語の使い方などを学び、大学院で役に立った。また、専門性を高めるために学部の専門授業を履修した。簿記論、管理会計、経済学、マーケティングなど、すでに韓国で勉強していたが、日本語で専門用語を学ぶことは意義があった。

フラットな社会参加の場を求めて

授業以外での社会活動にも積極的に参加し、以前に海軍でライフセーバーの資格を取った経験を生かして、日本で赤十字のライフセーバーの資格を取り、ボランティア活動に参加した。赤十字を選んだ背景には、外国人でも差別されることなく参加できることがあった。

個人的には日本という国の生活も、韓国と変わらないんだ。ちゃんとした目的意識と、自分ができるところをがんばれば、何とかできるんじゃないかという考え方ももちました。それで日本に来た時に、生活に慣れていない状況で、もっと日本の文化とか社会に入ろうとしたら、何をすればいいかって思ったら、やっぱり、ちょっと、まあ、社会的な差別というか、差別がないところが、非営利法人、つまり赤十字とか、ボランティア活動ができる場所は、そんなに人種的な差別とか、まあ、表現が悪いんですけど、社会的な差別とか、ゼロじゃないですか。

赤十字のボランティアの活動では熊本にも行きたかったがコロナ禍で参加が難しかった。それでも、あちこち（ボランティア活動を）探して全部参加して、人間関係を広げた。

大学院（MBA コース）に入って

大学院に入って、日本語の学習は役立った。MBAの学生は全員、社会経験5年以上で学部生ではないので、大人としての自分のイメージ管理が必要で、日本語のこなれた表現を使えたことが印象をよくした。例えば自己紹介で「お初にお目にかかります」と挨拶したり、自分を「わたくし」と表現したり、授業で指名されたとき「先ほどおっしゃっていただいた内容の中で、自分は～だと存じ上げておりますが、～と考えてもよろしいでしょうか」といった硬い表現を使うと、外国人なのにどうして丁寧語や謙譲語を知っているのかと一目置かれた。MBAコースはアメリカ式でクラスでの発言の内容と回数で評価されるため、正しい日本語と文法を磨いておいたことが非常に役に立った。また、日本語プログラムで学んだ論文の書き方が大学院での論文作成に役に立った。

留学の意味と今後について

Aさんは将来について次のように語る。

実は今、進学した理由としては、正直、自分の働いていた会社は、有名だし、お金の苦勞無しで人生最後までできるような金額を出してくれる会社で、ほんとにいい会社ですが、そこをやめてまで日本のMBAを目指してきた理由は、自分がやりたいことがはっきり見えたからです。

Aさんは韓国、アメリカ、日本の三国で活躍する税理士になり、国際税理士事務所を設立することが夢だ。すでに韓国の税理士とカリフォルニア州の米国公認会計士の資格は取得している。現在大学院2年目で、すでに日本の監査法人から内定をもらっており、ここで3年から5年ぐらい学んでから独立するつもりでいる。将来を見越してすでに日本で一戸建ての住居を購入しており、将来は改築して事務所にする予定だ。専門職として、高度人材ポイント制を利用して日本で永住権を取りたいとも思っている。成功したら、日本語を学ぶ学生のための奨学金を作ることを考えている。

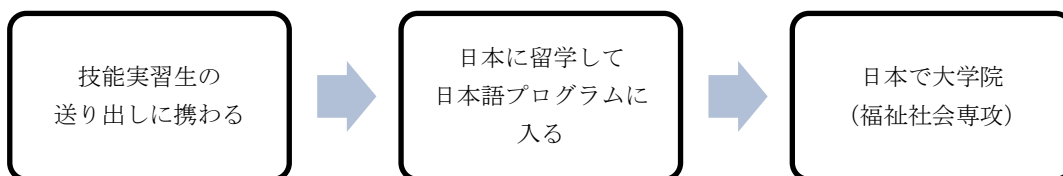


【写真1 大学の柔道部でのAさん】

日本語教育プログラム受講時に柔道部の活動に参加し、当時のメンバーとは今でも定期的に会っている。

3.2 Bさん：中国で高齢者介護人材の育成に携わりたい

Bさんは来日前は中国の国際交流機関で、技能実習関係の送り出しの仕事に20年間携わってきた。日本の技能実習制度に介護が追加されたことから、日本で介護制度の理念、保険制度について学ば中国に帰国してからもその知識を生かせると思った。



【図2 Bさんの来日前と留学の流れ】

40歳を超えての社会人留学であったため躊躇する気持ちもあった。しかし、日本の大学に相談したところ、大丈夫だと励まされた。また、留学を家族が理解し、14歳の子どもは夫の姉がサポートをしてくれたこともあり、留学を決断した。

私の頭の中では35歳以下でないと留学の機会がなくなるかなというイメージでした。

来日後

日本に留学すると、大学院の準備としてまず日本語プログラムに入った。すでに日本語能力試験（JLPT）のN1をもっていたが、聴解力、敬語の丁寧な話し方、文法力などのレベルを上げたいと思っていた。プログラムでは、アカデミックな日本語の書き方を学び、大学院の研究計画書の作成や論文執筆に役立てた。また、フィールドワーク科目を通じたインタビュー調査の経験を大学院での調査活動に生かした。そのほかにもプログラムで行った神楽坂の地域ボランティア活動で地域の文化振興について知った。日本語を学びながら進学準備をしたが、教員やスタッフに進学に関する質問、相談ができたことで、順調に情報を把握できたと振り返る。Bさんは無事に希望の大学院に進学することができ、修士課程では自分が研究したかった介護分野について学んだ。修士論文では、技能実習生の監理団体について調査し、自分のこれまでの経験を生かした研究をすることができた。コロナ禍で調査が遅れるなど苦勞もしたが、修士論文もほぼ出来上がっている。

Bさんは来日する前、何のために留学するのかとよく周囲の人から聞かれたが、当時は何のために行くのか言えなかった。これまでやってきた仕事との関連、日本との仕事でもっときれいな言葉と話したいといった希望が頭の中でごちゃごちゃになっていた。しかし、今では次のように語れるようになった。

今振り返ると、自分の仕事の中でできないこと、もっとやってみたいこと、経験したことをまとめること、問題意識をもっていることを論文にまとめられたことに意味があった。大学院の学位をとることだけでなく、研究で得られたことを社会に生かしたい。

これからの道

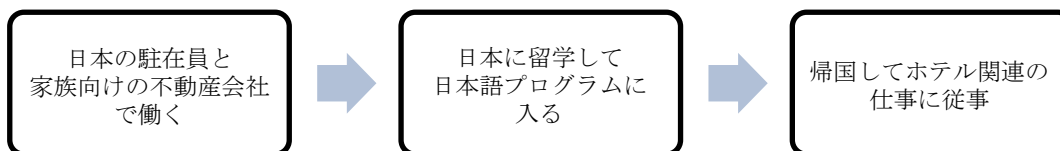
Bさんは大学院を終えたら、帰国して学んだことを生かして、中国社会に貢献できればと思っている。現在、日本にいる知り合いの監理団体でアルバイトをしており、帰国するのか、あるいは日本の技能実習生の監理団体で働いてもっと情報をまとめてから帰るのか、考え中である。



【写真2 日本の大学院の入学式に臨むBさん】

3.3 Cさん：ベトナムでホテルビジネスをしたい

Cさんは大学で日本語を専攻し、来日前は日本の企業（不動産仲介業）で、日本人の駐在員と家族のために不動産の手配をしていた。



【図3 Cさんの来日前と留学の流れ】

仕事で日本人と接するうちに、ベトナムにいる日本人と日本にいる日本人を比べたい、日本の生活を体験したい、日本に行きたいと強く思うようになり、会社を辞めて来日することにした。

一回でも日本に留学した方がいいと思います。私、日本に行くことは大変遅くなった。人生で。若い時に、早ければ早いほど留学にいいと思う。

Cさんは留学によって自分の日本語が飛躍的に上手になるとは期待しておらずN1を取るといった目的はもっていなかった。それよりも大切だと思ったことは顧客と自然な会話ができるようになることだった。そして、顧客に何かを説明する際に、専門的な言葉が使えなくとも、生活体験を通じて理解した言葉を柔軟に使うことで説明できるようになることだった。

キャリアアップではないかな。お客さんが日本人だから、今後お客さんと話すときに幅広い内容になって、いろいろ話せるようになって。日本に行かないとできない、わからないかなと思って。

来日後

Cさんは留学してから、肉体的にも精神的にも辛かったと振り返る。大学を卒業してから時間がたっていたため、若い学生の倍ぐらい勉強に取り組む必要があった。また、経済的にも余裕がなく、アルバイトと勉強のバランスが難しいと感じていた。

日本に行く目的が何だろうかと自分と相談しました。お金は後でも儲けられるかと思って、留学はこの年齢で人生に一回だけのため、あの頃、勉強しました。

日本語の学習で記憶に残っているのは、社会や文化を学ぶクラスだ。日本のメディア作品から社会文化を学ぶクラスで勉強したことをきっかけに、メディア番組に関心をもつようになり、今でも日本の番組を有料で（毎月40ドルぐらい払って）毎日見るようにしている。日本の社会的な問題がわかるようになると顧客とスムーズに話せるようになる。帰国後に就職活動で日系企業に応募した際、大学で日本語を研修したと言うと「ああ、そうですか。すごいですね」という反応が返ってきて、自信につながった。

帰国後の道

ベトナムに帰国した後、日系のホテルの営業部門に就職したが、運営側とベテランの従業員の間に意識の差があり、運営側がきちんとした研修をせず、日本のおもてなしの心を教えようとしなかった。このため、古い従業員のマナーは1つ星か2つ星だと感じた。Cさんは日本人の上司と現地スタッフの間で板挟みとなって苦しみ、半年ぐらいで仕事を去った。ホテルの社長についても尊敬の気持ちをもてなかった。

退職してすぐに、前に働いていた日系企業の社長に誘われて、インドネシアの会社で働くことになり、ジャカルタに渡ったが、コロナの影響でベトナムに帰国した。今はホーチミンで欧米系の資本のホテルの営業部で働いている。仕事は新規顧客を探す営業活動で、レジデンスに住んでいる日本人には日本語で対応する。会社は以前は日本人を現地採用していたが、今はベトナムに詳しいベトナム人が採用されるようになった。現在の上司は欧米人なので仕事で英語が必要になり、日本語を忘れないように勉強している。Cさんは将来の目標について以下のように語る。

将来、10年後、45歳ぐらいで、自分のホテルをもちたい。小さいホテルで、ホーチミンではなく、もっと涼しい場所で日本風のお風呂付きのホテルを作りたい。だからホテルの知識を身につけるために、ホテルで働く。



【写真3 職場でのCさん】

4. 考察

以上の3名の語りを①社会人としての学びの方向付け、そして、②葛藤と変容の語りという観点から整理すると以下のようなになる。3名とも社会経験（職業経験）を踏まえて留学や日本語学習の方向付けを行っており、自己主導的な学びの実例を見ることができる。同時に、3名とも留学中、あるいは留学前後の葛藤が語られ、どのようにそれに対応したのかが省察されており、変容的学習のプロセスが見られる。

【表2 3名の語りの中に見られた自己主導型学習と変容的学習】

	①社会人としての学習の方向付け (自己主導型学習)	②葛藤の省察と変容のプロセス (変容的学習)
Aさん	来日前から将来の計画を明確にもっており、大学院進学のために何をしたいのかを見据えて、日本語プログラム、大学院で学んできたことが語られている。	社会人としての経験が今の自分を作っていることを語っている一方で、自己の環境に根差した保守的な考え方が自分自身の行動を規制していることを振り返っており、日本での人間関係の境界線を越えるためにどのように変容したかが語られている。
Bさん	中国での技能実習生の送り出しの経験が大学院の調査と直結して語られている。また、大学院での調査活動により、自分が仕事で感じたことをまとめられたことへの達成感、学んだことを社会に生かしたいという気持ちが語られている。	40歳を超えて留学してもいいのかという来日前の心の葛藤が語られている一方で、進学希望であった大学の職員の言葉や家族の支援により留学を決めたプロセスも語られており、留学に向けた変化がうかがえる。また、来日前はなぜ留学したいのかと聞かれて自分の想いをうまく語れなかったが、今では留学の意味が語れるようになったと振り返っており、自分自身の変化を意識している。
Cさん	来日前もベトナム帰国後もホテルや宿泊関係の仕事に就いており、留学の目的とその後のキャリアの方向付けが一貫している。	留学中に精神的、肉体的に厳しい状態であった中で勉強に集中することを選んだプロセス、そしてベトナム帰国後の日系企業での仕事における葛藤と転職を通じた変容のプロセスが語られている。

上記の①の社会経験（例えば職業経験）を踏まえた学習の方向付け（自己主導型学習）、そして②の葛藤の省察力は明確に分けられるものではなく、相互作用していると考えられる。例えば、Aさんの場合、職業経験は、将来のキャリアを明確にする上で重要な役割を果たしており、留学における学習の方向付けをしているとともに（①）、社会経験があるからこそその葛藤も語られている（②）。Bさんの場合も、社会経験（職業経験）があるからこそその留学であるものの（①）、自己のおかれている環境や立場で留学することに葛藤を抱えており、それを乗り越えた過程が語られている（②）。また、Cさんの場合も来日前の職業経験と留学の目的が強く連動している一方で（①）、留学経験において経済的、肉体的な負担や葛藤があったにもかかわらず、それを乗り越えて勉強に集中していく変化が語られており、帰国後についても転職先で感じた現地の日系ホテルのマネジメントへの疑問や葛藤、転職を通じた変容が語られ、社会経験を踏まえた自律的な学習やキャリアの方向付けとともに、そうした経験の積み重ねがあるからこそその葛藤と変容が見られる（②）。

こうした修了生達の自律的な学習の方向付けと葛藤の相互作用は、社会経験のある学生のアドバイジングに生かせるのではないかと考えられる。一般的に社会人経験のある学生は、一般学生（10代後半から20代前半）よりも「大人」として扱われ、教員は「大人だから大丈夫だろう」と考えがちである。本稿の知見は、社会人経験のある学生が自律的な学習の方向付けを行っていると同時に、社会経験があるからこそその悩みや葛藤も抱えてい

ること、そして葛藤を省察しながら変容していることを示しており、教育関係者がこうした相互作用を意識することは、多様な学習者のアドバイジングに役立つと考える。

5. 話し手（修了生）と聞き手（教員）の対話

ライフストーリーとは、桜井（2012）が述べる通り、調査者が話し手の経験に基づいて、その人の生活世界とその背景にある社会文化を読み取り、記述する質的調査法であり、聞き手と語り手の相互作用によって作り出されるものである。3人の修了生のライフストーリーインタビューは、彼らの情報を実験室のような環境で一方向的に抽出したのではなく、調査者（教員）と修了生達のインタビューにおける対話の中で生み出されたものであった。最後に、修了生達が教員がまとめた自分のライフストーリーを読んでどのように感じたのかフィードバックの内容を示すとともに、教員の振り返りを分析し、教員がプログラム修了生のライフストーリーインタビューを行うことの意味を考えたい。

5.1 修了生からのフィードバック

Aさんのコメント：

先生の文を読んでもう一度あの時を回想してみました。法政 JLP での1年間の生活はただ日本語を学ぶ過程ではなく、私自らの「自己省察」と「新しい挑戦を探求するきっかけ」になりました。ストーリーにも書いてあるように、最初の学期が始まって3ヶ月間は、保守的で硬い考え方をもっていた、自らの自己省察の時期であり、その自己省察を通じて当時のストレスとなっていた問題を解決するための論議が行われました。しかし、JLP 課程でもし言語の教育だけを扱っていたら、もっと時間がかかったかもしれません。これらの問題は、文化や歴史に関する科目が次のように解決してくれました。「態度の問題、考え方の限界、現場（環境）の問題」、これらの問題が整理された後、以前に立てた目標のために何をどのようにすべきかが見え、より精巧で緻密に調整することができました。それは、現時点での日本に私がいられるようにしてくれた基盤に違いないと思います。今回のインタビューで、再び自分自身のマインド設定ができました。つまらない私のストーリーと事例が、これから入学する後輩の方の役に立つと嬉しいです。法政 JLP の1期生として、恥ずかしくないようにもっと精進します！ありがとうございます。第一に、法政 JLP は新しい環境の中で自己省察のきっかけになった！第二に、法政 JLP は新しい人生への挑戦のための助っ人だった！

Bさんのコメント：

インタビュー内容を先生が本人の話以上に上手くまとめてくれたことに感心しました。調査対象が外国人なので日本語の表現が十分ではないと思いましたが、まとまりのない話をまとめてくださってとても感心しました。

Cさんのコメント：

非常に素晴らしい調査だと思います。私の年齢に近い方は、留学をすることに対して、どの程度、自分に有益な意味をもたせられるのかという悩みを抱えているのです。（もし私のストーリーで）参考にできるものがあれば、自分と完全に同じ状況ではなくとも、ある程度、想像できるので、前向きに進めやすいかと思います。

5.2 教員の振り返り

調査者3名でインタビューを振り返った際に出されたコメントは大きく分けて2点あった。1点目は留学生の教育に携わる教員としてライフストーリーインタビューをどのように教育に役立てていくのかという点であり、2点目はライフストーリーインタビューの聞き方に関するものであった。

1点目（教育プログラムへの応用）として、社会人経験者の背景やプログラム当時の気持ちに対する理解と教育的な支援が挙げられる。筆者らは、3名の人柄を授業を通じてある程度は知っていたが、今回のライフストーリーインタビューを通じて、これまでには見えていなかった様々な事情も知ることとなった。修了生たちが在学中にどのような様子であったのか記憶をたどり、「そういえば～さんは疲れた顔をしていた時期があった」など、当時の状況を思い出しながら、彼らの語り（ライフストーリー）を読むことで、修了生達が在籍していた時期に、教育プログラムとして十分な対応ができていたのか、そうでないとしたら、どのようなことができたのか全員が考えさせられた。こうした修了生たちとの対話は、今後の留学生アドバイジングに生かしていけるのではないかと考える。

2点目（インタビュー方法）に関しては、修了生の人生についてどこまで深く聞いてもよいのかという点であった。ライフストーリーは生い立ちから相手の人生の歩みについて時系列に聞いていく手法をとるが、ストーリーの中でもう少し知りたい部分があったときに、どこまで聞いてもよいのかが悩ましいという話が出た。この点は、修了生にメールで「～についてもう少し知りたいので、もし可能なら教えてほしい」、というフォローアップ調査の形で依頼した。一度のインタビューで十分に聞けないこともあるため、インタビューのフォローアップが重要であるということを感じた。

以下、3名の個別の振り返りを挙げる。村田はインタビューとライフストーリーの執筆の両方を行ったため、両方に関して振り返っている。池田、長谷川はインタビューの質問をする担当であったため、インタビューに関して主に振り返っている。

村田（A、Bのインタビュー、A、B、Cのライフストーリーの執筆）

本学の日本語教育プログラムは、2020年で4年目を迎えるが、プログラムの修了者はどのような人生を歩んでいるのか話を聞いてみたいという思いで今回のインタビューに臨んだ。インタビューに協力してくださった3名の修了生のみなさんに深く感謝したい。日本語プログラムの在籍者は20代前半の学生が多く、国で社会人経験のある学生は少ない。今回のインタビューで、社会人経験のある人々にとっての、それぞれの職業経験に根差した留学の意味を知ることができた。

筆者自身が社会人として留学した経験があったことから、3人のインタビューは興味深かった。3人とも職業経験を踏まえてしっかりと将来の方向付けをしている一方で、留学に際して様々な葛藤を抱えていたことに関して、筆者自身も社会人経験を経て、30代で大学院留学をしたことから共感する部分が多かった。インタビューでは、自分のそうした経験と重ねながら修了生と対話したのではないと思う。

また、Bさんの感想に「本人の話以上に上手くまとめてくれた」、「まとまりのない話をまとめてくれた」とあったのを読み、考えさせられた。ライフストーリーをまとめるという行為の中で、何を伝えて、何が伝えられなかったのかということ筆者自身が省察し、捉えなおすことが必要であると感じた。ストーリーをまとめる際に自律的な学び、葛藤や変容という二つの軸を意識して再組織化したが、最終的なライフストーリーの中に含めることができなかつた断片的な語り(桜井 2012、岸 2015)の中にも修了生の様々な想いが込められていることを忘れてはならないだろう。

ライフストーリーインタビューは語り手と聞き手の対話であり、双方にとって非常に省察的な活動であ

る。インタビューをするだけでなく、そこからストーリーを作り、相手に読んでもらったり、一緒に読んでディスカッションしたりすることでさらなる対話が生まれるのではないかと思う。プログラムの修了生のインタビューやライフストーリーを通じた対話を今後も続けることで、日本留学、そして日本語を学ぶということの意味を学生と共に考え、教育プログラムに生かしていきたい。

池田（A、B、Cのインタビュー担当）

個々の学生がそれぞれの目標や目的、事情を抱えて、日本語教育プログラムを受講したり、授業に出席しているということを改めて認識させられた。彼らはただ、日本に来て日本語の授業に出席しているだけではなく、特に今回インタビューを行った社会人を経験して日本語教育プログラムを受講している学生は、日本語を学習するということを自分の人生の中にしっかりと位置付けることができているということを感じた。このことについては、20歳前後の学生とは違い、今回インタビューした3名はそれだけ人生を経験しているということかということも考えた。但し、そのような彼らであっても留学中に葛藤を抱えていたり、変化があったということは教員として今後学生と関わる際の大切な点になると心に留めておきたいと考えた。また、今回、修了生が自身の当時について我々（他者）に語ることで、自分の日本語教育プログラムや留学での経験を彼ら自身がある程度客観的に振り返ることができたのではないかとということも感じた。さらに、当然であるが、日本語教育プログラム受講後、留学後も彼らの人生は続いていく（続いている）わけであり、学生それぞれに人生があり、一人の人としてそれを生きているということも改めて認識させられた。教員としてどこまで深くその学生の個人の領域に入っていきべきか、またそもそも入っていてもいいのかという問題もあるが、単に日本語を教えるだけでなく、そのような学生の目標を少しでもサポートするようなことまでできれば、より良い授業、教育の提供に繋がるのではないかと考えた。

長谷川（Cのインタビュー担当）

Cさんを以前教えたことがあり、知っていたため、インタビューはやりやすいと感じた。ただ、知っている情報も確認の意味で相手の口から一から語ってもらうことを意識し、まっさらな状態で話を聞くことの重要性を感じた。決めつけや思い込みを捨てることで、相手のストーリーが真に理解できると感じた。また、こちらが話を聞いて質問することにより、相手の思考や気持ちが整理されていくような面も感じられた。Cさんに長時間のインタビューを行うことで、単に「学生」としてのその人ではなく、社会に生きる一個人としての内面（背景、価値観、人となり）をより深く知ることとなった。授業活動の中ではなかなか立ち入れない、踏み込めないところまで知ること、その人との距離が縮んだように感じた。純粹に、年齢を重ねてから新しい環境に飛び込み挑戦し続けている学生に対して尊敬の念をもつとともによい刺激となり、学ばせてもらった。一方で、留学中の苦悩について聞いたときは、留学後ではなく留学中に聞いておけば何かサポートができたかもしれないと考えた。学期中に学生一人一人とこのような対話や心がけができれば、それがたとえ長時間インタビューの形ではなくとも、学習支援のみならず心理的なサポートにも有効ではないかと考える。学生の人生に寄り添う姿勢を普段からもってほしい。

6. おわりに

ライフストーリーインタビューによって、修了生の人生における目標（学習の方向付け）、葛藤、変化、成長を知ることが、教員にとって大きなよこびであるとともに、自分たちに何ができるのか、教育プログラムでどのような取り組みや改善ができるのかを考え、実践していくための重要な機会である。また、教員、学生という立場を超えて、相互構築的に学び合っていく貴重な機会であるということも今回のインタビューの実践を通じて筆者らは強く感じた。今後もこうした対話の機会を継続的に作っていきたいと考える。

このような手法、つまりライフストーリーインタビュー、ストーリーのまとめ、修了者

の感想、教員の振り返りのサイクルを重ねていくことは、本論文で取り上げたプログラムだけに限らず、留学プログラムを含めた多様なプログラムの学生のフォローアップや教育改善のヒントとして役立つものではないかと考える。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 19K00720 の助成を受けたものである。

参考文献

- 池田庸子 (2019) 「元日本留学生のライフストーリーにみる留学評価—交換留学から英語教育の道へ—」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』2:47-58.
- 岸政彦 (2015) 『断片的なものの社会学』朝日出版社
- 久野弓枝 (2017) 「中国人編入留学生のキャリア形成に関するライフストーリー研究 (3) —トランジションと agency に着目して—」『札幌大学総合論叢』44:61-71.
- 久野弓枝 (2018) 「自己内省の観点からのライフストーリーの再読について—留学生の成長をサポートするビジネス日本語教育実践を目指して—」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』130:85-98.
- 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』弘文堂
- 佐藤正則 (2013) 「留学経験の意味と自己実現についての考察—元留学生のライフストーリーから—」『言語文化教育研究』11:308-327.
- 中井好男 (2018) 「社会的文脈から日本語学習と学習者オートノミーを捉える試み—日本で働く中国出身者の学習経験についてのライフストーリーをもとに—」『阪大日本語研究』30:93-110.
- 三代純平 (2014) 「セカンドキャリア形成へ向けた文化資本としての日本語—スポーツ留学生のライフストーリーから—」『言語文化教育研究』12:221-240.
- Knowles, M. (1975). *Self-Directed Learning, A Guide for Learners and Teachers*, New York: Association Press.
- Mezirow, J. (1991). *Transformative Dimensions of Adult Learning*, San Francisco: Jossey-Bass.